

★メールマガジン「本はともだち～山口県子ども読書支援センターニュース」配信中！

メールマガジン「本はともだち」は、新刊紹介や県内の行事など、より充実した内容で配信中です。読者登録の方法は県立図書館のホームページをご覧ください。

【山口県子ども読書支援センター行事】

★「幼児のためのおはなし会」（毎月第一火曜日）

※12月は定員に達しましたので締め切りました。

《11月のおはなし会で使った本》

『ぐりとぐら』 大村百合子/画 福音館書店 1998.3

『たまごのうた』 市原淳/絵 フレーベル館 2017.12

『まるまる』 中辻悦子/さく 福音館書店 1998.2

『まる、しかく、さんかく』 ディック・ブルーナ/ぶん・え 福音館書店 2010.4

『〇△□なーにかな？』（なぞなぞエプロンシアター）中谷 真弓/著 メイト 2007.5

★「第3回新刊児童書閲覧会」

○日時：令和4年12月14日（水）～12月18日（日）9：00～17：00

○会場：山口県立山口図書館 第2研修室（こどもとしょじつ 3F）

○対象：市町立図書館職員、学校図書館関係者、ボランティア関係者、子どもの本に関心のある方

○定員：一人1時間、各時間帯10名程度（要申込み）

○申込方法：FAXまたは電子メール（HP上の参加申込書をダウンロードしてご利用ください。）

○申込締切：令和4年10月12日（水）17時（定員になり次第締め切り） ○参加費：無料

◎申込み・連絡先：山口県子ども読書支援センター

（電話：083-924-2111 FAX：083-932-2817 Eメール：a50401@pref.yamaguchi.lg.jp）

【新刊紹介】価格は消費税抜き

＜絵本－乳幼児から＞

『チキカンゲー』 樋淵朋巳/作 こぐま社 2022.10 ¥950

チキカーン、チキカーン、チキカーン、グー！わんちゃんがタンバリンをならしながらリズムに乗って歩いていると、ねこちゃんにばったり。一緒に楽しくチキカーン、グー！と進んでいくと、今度はおいもちゃんが登場。メルちゃんも合流して、みんな楽しくチキカーン、グー！そこへまいごになったぼっちゃんが現れて…。楽しく陽気なリズムに心おどる赤ちゃん絵本。

＜絵本－5、6歳から＞

『ゆきのげきじょう』 荒井良二/作 小学館 2022.10 ¥1600

雪のふる小さな町。暖かい部屋で蝶々の図鑑をみていた男の子たち。ところがひつぱりあいになり、父さんの大切な本を破いてしまう。蝶が大好きな友だちにこの綺麗な図鑑をみせたかっただけに…。男の子はモヤモヤした気持ちのままスキーに出かけくぼみに落ちてしまう。そこに明かりのついた小さな劇場を見つけ…。雪景色と鮮やかな色彩のコントラストがなんとも美しい絵本。

＜絵本－小学校低学年から＞

『あずきがゆばあさんとら』 ペクヒナ/絵 パクンギョ/文 かみやにじ/訳 偕成社 2022.10 ¥1300

昔々、深い山奥にはばあさんが住んでいた。ばあさんの煮るあずきがゆはとってもおいしいので、あずきがゆばあさん、とよばれていた。ある暖かな春の日、山のあずき畑で草とりをしていると、とてつもなくでっかいとらがあらわれて…。韓国の小学2年生の国語の教科書に掲載され、語り伝えられてきた昔話。ペク・ヒナの絵と造形も味わい深く、韓国の文化に触れることのできる一冊。

＜絵本－小学校中学年から＞

『いのちがかえっていくところ』 最上一平/作 伊藤秀男/絵 童心社 2022.10 ¥1300

たもんは、お父さんと川に釣りに向かった。なかなかエサにいくつかが諦めかけたその時、さお先がグイグイッと曲がりすごい力でギョングョウひっぱられ、やつのことでイワナをつりあげた。心臓がバクバクして、魚をみると手が震えてきた。たもんの手の中にある大きくて美しいいのち。初めてイワナをつり、いのちと対峙した少年の物語。ダイナミックで逞しい絵もみごたえあり。

『PIHOTEK ピヒュッティ』 荻田泰永/文 井上奈奈/絵 講談社 2022.8 ¥2800

「たった一人、北極を歩いている。」頬をたたく風、ゆれ動く氷の海、北極で生きる術を知る動物たち。北極を冒険することは、生きること、そして死を感じるのだ、と語る著者の荻田泰永氏は、植村直己冒険賞受賞の北極冒険家。「ピヒュッティ」は「雪の中を歩いて旅する男」という意味。夜明けの風景の色彩や雪や氷の白やグレーを背景に描かれる鮮やかな色づかいが美しい絵本。

＜読み物－小学校低学年から＞

『おかあちゃんにきんメダル!』 いどきえり/さく おしのとこ/え 国土社 2022.8 ¥1200

1年生になって初めての授業参観。教室に入ってきたお母ちゃんの右手をみんながじろじろ見ている。友達のよしおに「おまえの母ちゃんの手、なんで曲がってるの」と聞かれ泣きそうになった。お母ちゃんは若い時交通事故にあって右手に大けがをした。ある日、ぼくはお母ちゃんにひどいことを言ってしまう…。葛藤しつつも母の障害を自分なりに受け止めて成長していく少年の物語。

『ぼくは王さまおしごとコレクション』 寺村輝夫/作 和歌山静子/絵 理論社 2022.7 ¥1400

遊ぶことが好きで勉強が大嫌いな王さまは頭のいいところを大臣にみせるため、名探偵になろうとする…。わがままだけれどなぜか憎めない王さまが様々な仕事に挑戦する7話を収録。不朽の名作「ぼくは王さま」シリーズをテーマごとに選りすぐったコレク

ション。他に動物・冒険などのテーマがあり全5巻。作者・画家の共作で多数の作品がある人気シリーズのアンソロジー。

<読み物ー小学校中学年から>

『なりたいたいわたし』 村上しいこ/作 フレーベル館 2022.10 ¥1300

「学童クラブ・くれよん」に通う3年生の千愛。いつも一緒に4人のはずなのに、なんだかうまくいかない。置いて行かれてひとりぼっちの気がする。友だちにはダンスやスポーツ、勉強と一生懸命になれるものがある。わたしはどういうふうになりたいのか…。わたしがなりたいたいわたしを見つけなくちゃ。友だち関係に悩んだり、将来への希望や不安で葛藤したりする少女の成長物語。

<読み物ー小学校高学年から>

『ラベンダーとソプラノ』 額賀澤/作 いつか/絵 岩崎書店 2022.9 ¥1500

入学式で上級生の合唱を聞いた時、ラベンダー色の風が吹いてきたみたいだった。この色が似あうお姉さんになろうと決めた真子は小学6年生になり合唱団に所属。「今年こそ金賞を」の重圧に、練習では緊張感と冷ややかな雰囲気。そんなときボーイソプラノの朔と出会い、半地下合唱団に参加することに。無理して追い続ける金賞と楽しく歌う事に葛藤する等身大の女の子を描く。

『黒紙の魔術師と白銀の龍』 鳥美山貴子/著 講談社 2022.9 ¥1400

小6の悠馬が黒爪山で捕まえたのは大きな黒とかげ。しかし気付くとそれは黒い紙でできたとかげになっていた。願いと呪いが込められた折り紙が悠馬たちに襲い掛かる。時代を超えて結ばれる親子の絆と不器用な少年たちのスペクタクルファンタジー。著者は2021年『黒と白の対角線～おりがみおとぎ草子～』で第62回講談社児童文学新人賞を受賞、改題した本作がデビュー作。

<ノンフィクションー小学校低学年から>

『みんなえがおになれますように』 うい/作 早川世詩男/絵 学研プラス 2022.9 ¥1400

「トランスジェンダーの人は何にこまっているんですか。」小学生の作者が感じたことを素直にLGBTQ+の人たちに問い思ったこと感じたことをまとめる。LGBTQ+や多様性について考えるきっかけとなる一冊。作者は2010年生まれ。作者の自費出版『小学生の私たちが知っているだけで、せかいをかえることができる。』をもとに絵や新規インタビューを加えて再編。

<ノンフィクションー小学校中学年から>

『すなはまのバレリーナ』 川島京子/文 ささめやゆき/絵 のら書店 2022.8 ¥1600

1919年、ロシアから日本に亡命し、鎌倉に日本で初めてのバレエ学校を開校、日本のバレエの母となったエリアナ・パヴロバの戦争に翻弄された半生を、その弟子であり日本バレエ界を牽引し盛り上げた親子橋秋子、牧阿佐美の視点で描く。筆者自身もバレエを学び、現在は大学等の教育機関で舞踊学、バレエ史の講師を務める。文化芸術を継承する尊さと情熱が感じられる絵本。

『12歳までに身につけたいかしくなる読書の超きほん』 赤木かん子/監修 朝日新聞出版 2022.9 ¥1000

小学3年生のショウとツグミの前に本の世界を自由に行き来するネコのミーナが現れる。ミーナは本と仲良くなる方法を二人に教えてくれる。本の種類や分類、図書館の使い方、本の選び方や読み方などについてマンガやイラストで分かりやすく紹介。監修者は児童文学評論家。子どもの本や文化を研究し全国の学校・公共図書館の監修に携わる。子ども読書に関わる人にお勧めの一冊。

<ノンフィクションー小学校高学年から>

『あの子は、わたし。ホロコーストを演じた「いとしま8・6平和劇」』 ささきあり/文 佼成出版社 2022.7 ¥1500

福岡県糸島市の「ハローピースアクト」は、平和を考え命の大切さを語り継ぐ活動をしている劇団。1991年糸島市内の小中学校の先生らが立ち上げ、現在子ども主体で平和劇を行う。2016年には「アンネの日記」続いて「ハンナのかげん」を上演する。「ホロコースト（大量殺戮）」を題材にすることで、子ども達が平和や差別・偏見について学び、向き合っていく様子を描く。

<読み物ー中学生から>

『イコ トラベリング1948-』 角野栄子/著 角川書店 2022.9 ¥1500

太平洋上、南米からポルトガルへ向かう客船に乗っている西田イコは26歳、職業「トラベリング」。戦後の激動期、市ヶ谷の名門女子校に中2で編入したイコは英語に出会い「現在進行形」のとりこに。まだ見ぬ世界に強くあこがれ、いつも前のめりな彼女は、高校で、大学で、そして社会で、いろいろな人と出会い、別れながら、夢に向かって進んでいく…。角野栄子の自叙伝的物語。

『人間みたいに生きている』 佐原ひかり/著 朝日新聞出版 2022.9 ¥1600

三橋俊は名門女子高の2年生。痩せたいわけではなく、食べることに嫌悪感を覚え、食べ物の臭いすら受け付けられないことを友人だけでなく、両親にも打ち明けられない。ある日、「吸血鬼の館」の噂がある洋館を訪問して主と意気投合し、食事を気にせず過ごせる場所を手に入れることに。「食べる」という人間の営みを肯定できずに「人間みたいに生きている」少女の成長を描く物語。

<ノンフィクションー中学生から>

『どうなってるんだろう？子どもの法律 新版 一人で悩まないで！』 山下敏雅 渡辺雅之/編著 高文研 2022.9 ¥2200

子どもの事件に取り組んでいる弁護士の山下氏と元中学校社会科教員の渡辺氏による同名シリーズ第3弾。本書では、成人年齢の引き下げを含め、未成年の子どもが直面する「学校」「家庭」「性」「犯罪」「労働」の40の質問に、関係する法律や対策を具体的かつ分かりやすく回答。巻末には、弁護士会による子どものための相談回線の電話番号一覧と、山下弁護士の連絡先を掲載。

<研究書>

『私のことば体験』 松居直/著 福音館書店 2022.9 ¥2000

11月2日に亡くなった絵本の編集者松居直の自伝。月刊誌『母の友』の2009年4月号から2021年3月号までの連載を単行本化。幼少期から学生時代までに出会った数々の物語や戦時中の思い出など、その後の編集者としての姿勢を形成したエピソードは興味深い。安野光雅による折々の挿画も収録。「あとがきにかえて」は絵本作家であり、松居氏の長女である小風さち氏が執筆。

『絵本で広がる小学校の授業づくり 豊かな心と思考力を育む』 齊藤和貴/著 小学館 2022.7 ¥2000

元小学校教諭（司書教諭）であり、現在は京都女子大学で教員養成に携わっている著者が、自身の実践をもとに、絵本を小学校の授業に取り入れるポイントとコツを伝授。312冊の絵本を14のシチュエーションに分類して紹介。指導案や板書例の掲載があり、すぐに活用できる。少年写真新聞社発行「小学図書館ニュース」2009年4月～2010年3月連載を加筆・編集。

※【新刊紹介】の本は、県立図書館で現在受入準備中の本です。そのため、県立図書館の蔵書検索(OPAC)では検索できませんが、利用することは可能です。収書のための選書の参考として、閲覧、貸出等を希望される方は、お問い合わせください。

山口県立山口図書館では、電子図書館サービスを提供しています。利用案内はこちらから→

<http://library.pref.yamaguchi.lg.jp/dlibrary>

